

Title	<書評>浅岡潔編『今井清美学論集』今井清遺稿集刊行会発行やしま書房制作1992 397P
Author(s)	吉岡, 健二郎
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 102-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53196
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

浅岡 潔編 『今井清 美学論集』

今井清遺稿集刊行会発行 やしま書房制作 1992 397P

吉岡健二郎／京都造形芸術大学

多年、本会の委員として会の運営に尽力され、また優れた論文を本誌に発表された今井清氏は1989年、昭和が平成に変わって間もない1月31日突然逝去された。学問上の先達として四十年あまり兄事し、ことに前年の夏、たまたまミュンヘンで十日ほど同じホテルに泊まりあわせる機会にめぐまれ、楽しい日々を過ごした余韻のさめぬときの訃報であっただけに、思わず天道の不当さを嘆く気持ちに陥ってしまった。悲しみの気持ちは、関西学院大学で親しく教えを受けた人々の場合、一層大きかったであろうと思われる。その中の一人、浅岡 潔君は関西学院大学のなかに設けられることになった今井文庫の準備のため、故今井教授の書斎の整理に着手し、書架から膨大な量の原稿・覚え書き・ノートなどを見いだして今ここに見るような形に纏められたのである。その苦労たるや想像に絶するものがあつたであろうと頭が下がるばかりである。同時に浅岡君のような学生を持つことのできた今井教授の幸福をいささかともしくおもいさえする。氏の人柄であろう。

個人的なことを述べ過ぎたかもしれないが、三年に及ぶ浅岡君の努力によって生まれた本書は、今井氏の学問的歩みのあとを、まことに適切にたどれるよう編集されている。それは目次を見ただけでそれと解るほどである。まず目次をよんでみることにする。

目 次

序文	源 豊宗
第1章 カント美学解釈の端緒と発展	
I カント美学の問題	

— 美的理念を中心として —

- II 美的理念について
- III 美的主体の成立
 - フィードラーに関連して —
- IV カントに於ける天才論
- V 美的形成について
- VI 芸術と諸芸術
- VII 芸術史に於ける必然性の意味
- VIII 美的体験の一考察
- IX 自然美について
- X 芸術と道徳

第2章 日本の感性における美的理念の場の問題

- I デザインと日本的感性
- II 日本の空間とデザインについて
- III 日本芸術の諸特性
- IV 日本の感性の一考察
- V 日本の感性といけばな
- VI 日本文化の美的空間

— 日本の感性の源流を探って —

第3章 芸術における想像力の問題

- I 原始美術の一考察
- II 肖像画の一考察
- III 美的対象の問題
- IV 表現における現実の問題
- V 想像力

— その日本的感性への途 —

序

- 1 イメージの発見
- 2 想像力としてのイマジネーション
- 3 アレゴリー小論

今井 清 著作目録
 今井 清 略年譜

編集後記

第1章の諸論文は、章の題名のとおりカントの「判断力批判」に関する今井氏の解釈とその発展とを示している。第I節 カント美学の問題—美的理念を中心として—は恐らく卒業論文の草稿であろう。いまさら言うまでもないが近代の美学はカントの本書と共に始まる。学生の身で軍隊に入らざるをえず、敗戦によって再び学生に戻った今井氏は、近代美学の出発点にたち帰り、美学を根本的に自分の感性と理性で再構築しようと考えたのではないだろうか。物事を基本にかえて考えること、目先の問題に対する反射的な対応をせず物事の本質を問うという姿勢を保持すること、かかる態度が今井氏の生涯を通じて一貫している。

第II節 美的理念については第I節の論文に手を加えたものと思われる。京都哲学会刊行の雑誌「哲学研究」388号に掲載された今井氏の最初の仕事であり、氏はこの論文によって研究者としての第一歩を踏み出したことになる。カントも言うように美は自然美も芸術美も美的理念の表現である。とすれば美的理念の解明がカント美学理解の上で重要な問題であることは間違いない。理論理性および実践理性と並んで美的理性を想定することはできないにしても、構想力と美的理念との関係を、理論理性と純粹悟性概念、実践理性と理性理念との関係と類比的に考えることはできないだろうかというのが今井氏の提案である。

この提案が本論のなかで十分な説得力を持って展開されたかという点、必ずしも肯定的に答えることは出来ないように思うが、理論理性と実践理性の中間に位置し、両者を繋ぐ役割をはたすはずの判断力の特性を、美的理念と関係させつつ纏めた論述としては大変す

ぐれていると思う。「判断力批判」第1部“美的判断力の批判”についての良い手引きと言ってもよいだろう。ただ文中、ドイツ語の精神(ガイスト)という言葉が一八世紀では、フランス語のエスプリに当たる言葉として使用されており、判断力批判のなかでも略その意味で用いられている場合が多い点を配慮したら、文章がいくらか平易になったのではないかと感じた。

カントの研究から出発した今井氏はカントの理論を創作の立場から眺めようとした。そのような傾向は美的理念という構想力の内的直感に焦点をしばった先の論文にも既に表れていたが、第III節 美的主体の成立—フィードラーに関連して—において一層あきらかとなる。フィードラーはフランスの印象派のモネ、ルノワール、セザンヌなどと同世代のドイツの芸術理論家であり、西田幾多郎や画家・須田国太郎がはやくから注目した人物である。ドイツ語圏はもとより英語圏、そしてフランス語圏でもその重要性が認められるようになってきている。フィードラーはカントの認識論から影響を受けつつ、心身一元論の立場にたって独自の理論を展開した。創作の問題に関心を持ちつつカントを取り上げた今井氏がフィードラーに眼を向けるのは、ごく自然ななりゆきである。

ところでカントとフィードラーとの間には大きな差異が存在する。まずはカントはデカルト以来の二元論をとりつつその和解の可能性を「判断力批判」において示しているのであるが、フィードラーはデカルト的二元論の徹底的批判の上にその芸術論を展開する。当然フィードラーの芸術論にはカントやヘーゲルにみられるような体系性がない。

つぎにカントでは美的芸術がもつばら問題とされているのであるが、フィードラーでは美と芸術とのあいだに必然的關係は認められ

ていない。芸術の実現する価値は美ではなくて真実、視覚的真実なのである。

さらにカントでは主観的根拠しかもたない個人の判断がいかにして普遍性を持ち得るかが重要問題であったのにたいし、フィードラーでは芸術の問題が個に限定され、他者の理解できない領域になってしまっている。神は死んだと語った哲学者ニーチェより三歳年長のフィードラーにとっては自己の存在を確保することこそ最大の関心事だったと言ってよいだろう。無責任な大衆から見当違いの称賛を受けるより、自己の孤独に徹底した果てに他者との真の交流を得ることを望んだとも言えるだろう。唯我論者とか貴族主義者とか言われる所以である。しかしそのような非難にも拘わらず、学的関心を美の問題から芸術のそれへとシフトするうえで大きな貢献をした人物とすることに反対するものはいない。

今井氏も芸術に関心をもつ以上フィードラーをとりあげるのは当然である。ただ今井氏はカントをはじめとするドイツ観念論の哲学の素養が深いため、フィードラーに対する批判もカント、あるいは新カント派の視点に重点がかかり、十九世紀後半の精神的状況の中で真に発言するに値することを発言した一人物としてのフィードラーに対しては多少厳しいのではないであろうか。

第IV節 カントにおける天才論 及び第V節 美的形成について の二論文は問題提起という性格が認められるが、幾分かねが悪く、先行の二論文ほど論旨が明快でないように思われる。

第VI節 芸術と諸芸術 はヴィルヘルム・ピンダーの同名の著作に想を得て書かれたものである。今井氏はこの頃から芸術哲学、或いは芸術理論へと傾斜していくように見える。ピンダーは美術史家として著名であり、日本でも戦前に彼の「美術史における世代の問

題」が、翻訳されている。彼は芸術家の世代や年令の問題に注目したことで美術史に新しい視点を導入したが、さらにすすんで諸芸術の或る種の年令の如き側面に注目した。このよう考えの源がヘーゲルにあるだろうことは、容易に見て取れるが、身近なところではオスカー・ヴァルツェルなどの諸芸術に関する比較研究などが考えられる。それぞれの芸術にはそれぞれの成熟のときがあるという考えである。

ピンダーという優れた美術史家が諸芸術の歴史をたどるうちに芸術の部門によってその成熟の時期が異なると言わざるをえなくなりその理由を存在論的に説明しようと努めた著書であるだけに、この書物から学ぶべきことは多い。芸術とは絶えず流れ去る時間の中で、諸価値を救い出す行為であるとピンダーもフィードラー同様の考えを述べている。今井氏もピンダーのかかる洞察には賛成するが、しかし存在論的視点が終末論的色彩を次第にくくしていくことには懸念を表明している。歴史の不可逆性と論理的先後関係の不可逆性が必ずしも完全に合致するものではないことを指摘し、歴史、ことに芸術の歴史の自律性を尊重しようという今井氏の意見には賛成であるが、氏はこの論文執筆のころから具体的な芸術の姿のさまざまな在り方に目を向けるようになっていく。

今井氏はカントの研究、ことに判断力批判における美的理念の概念を中心に自己の立場の確立につとめてきた。そのような姿勢が根本的に変化したわけではないが、理念の現実化した姿に注目するという姿勢が明確になってくるように思われるのである。

第三章に納められている第I節の論文 原始美術の一考察 及び第II節の 肖像画の一考察 などがその具体例であり、第一章の第VII節 芸術史における必然性の意味 はその

ような現実的なものへと向かうための理論的準備と言ってよいと思う。即ち思弁の哲学の立場で語られる理念の発展とか自己展開とかに合わせて現実の歴史的事実を解釈するのではなく、歴史的事実の中に歴史を越えたものを探るという道をすすみ始めたと言って良いかもしれない。

必然性という言葉聞いて多くの人が先ず思い浮べるのは機械的必然ではないだろうか。つまり自然的法則の進行がとどめようもないという意味での必然である。芸術に関してこのような必然性を考えるのはおかしいと思う人でも或る芸術現象を理解しようと試みるとき、ともすれば陥りがちな見方である。例えばギリシア彫刻の素晴らしさを、ギリシアに素晴らしい大理石が存することから説明しようとする。芸術の成立を機械的必然として説明しようとする人は、芸術のみならず人間についてもそのように説明するだろう。そして意志の自由などと言う問題の存在も否定するだろう。

芸術の世界で語られ得る必然性とは、作者の内的必然性(W・カンディンスキー)と言ったものでしかないだろう。芸術の歴史は芸術作品の歴史でもあるが、作品の時間的前後関係を機械的因果関係として捉え、後の作品は先立つ作品の必然的結果だとして理解することで満足するとすれば、そのような理解は芸術の自律性を無視した浅薄な考えに過ぎないことを今井氏は強調したかったのだと思う。A・リーグルの引用はないが、たぶん氏の念頭には絶えず浮かんでいたことだろう。

氏は1965年頃から日本の芸術について筆をとるようになる。氏の関心は最初に問題とした美学上の概念、即ち美的理念なるものをより現実に即したかたちで論じる方向をとったといえる。即ち我々にとって最も身近な日本の芸術についてその根本性格を問うに至る。

第二章 日本の感性における美的理念の問題 の諸論文は第一章の論文と違って何れも大変読みやすく且つ興味深い。そして又西欧文化とは異なる日本文化の特色を、単なる思いつきでなく根本的な地平で論じている点で示唆的である。例えば日本人は自然を愛好するとよく言われるが、日本語のなかには西欧的自然概念は存在せず、自然が総体とし意識されることがなかったという大野晋氏の説明を紹介しつつ、日本独特の心の在り方ものの感じ方にすすんで行くのはなかなか面白い。言葉がないということは、或る対象が対象として意識されないということである。我々が日常使用している言葉の多くが日本語としての歴史の浅い翻訳語や外来語であることを思うとき、我々の精神的基盤とは一体どこにあるのかと思わず寒気が背筋をはしってしまう。今井氏は指摘していないが、日本語では自己をさす単数一人称が明確でない。自他の区別から出発する文化のなかで教育を受けた人にとっては、奇妙な言語体系をもった文化だと思われるかもしれないが、日本人の自己主張のなさと呼ばれるものが果たして日本文化の欠点なのであろうか。自他の融合から出発する文化にも充分可能性があるのではないだろうか。今井氏の論文を読みつつ感じたことである。